

スタッフ	教授	佐藤 了(さとう さとる)
	准教授	中村 勝則(なかむら かつのり)
	助教	渡部 岳陽(わたなべ たかあき)

研究室の研究テーマ

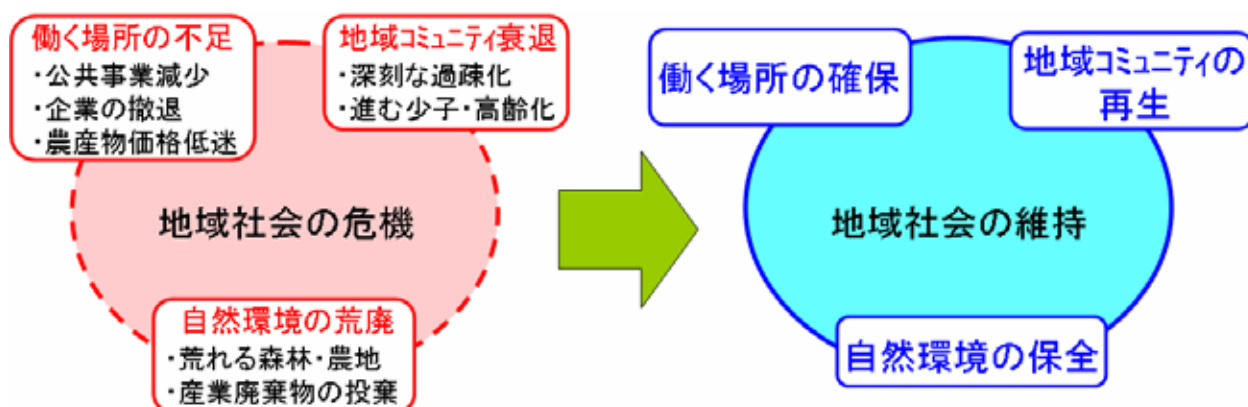
変革期における地域社会の維持可能な条件と諸方策

1. 問題意識 ~なぜ、このテーマに取り組むのか~

経済のグローバル化・規制緩和が進む中、多くの農村は、働く場所の不足、地域コミュニティの衰退、自然環境の荒廃に見舞われており、地域社会は危機的状況に追い込まれています。

このままでは、地域の自然環境、コミュニティ、食料生産基盤といった、私たちの生活にとってかけがえのない「財産」が失われてしまいます。それで良いのでしょうか？

私たち地域計画学研究室では、地域にある自然環境を保全すること、地域の資源を活かした生産を行い、その付加価値を地域内で獲得すること(=働く場所の確保)、互いに信頼し助け合える地域社会を取り戻すこと(=地域コミュニティの再生)、それらを一体的に追求することが「住み良い」地域社会の維持につながる道であると考えています。



では、それを実現する条件とは何でしょうか？どんな方策が必要なのでしょう？こうした課題を明らかにするため、地域社会の維持に向けた取り組みを進めている(または進めようとしている)地域を中心に、様々な視点からの調査と分析・提言を行っています。

2 卒業論文のテーマ

2006 年度、5名の学生が取り組んだ卒業論文のテーマは次のとおりです。

地域資源保全向上活動を通じての地域コミュニティ活性化の条件

環境会計による無代かき栽培の経済性と環境効果の評価

飽和市場下における新品種メロン「秋田甘えんぼ」のブランド化に向けた課題

比内地鶏のマーケティング戦略の課題

菜の花の多段階活用における経済性の評価

以下では、研究成果が現場の取り組みに活かされた例として、 について詳しく紹介します。

地域資源の有効活用に関する研究

「菜の花の多段階活用における経済性の評価」

(主な内容)

地域に広がる耕作放棄地に菜の花を植え、多段階で活用することにより、以下の様々な効果が発生します。

農地の有効活用

食料生産(なばな、菜の花油)

エネルギー生産(廃食油由来の軽油代替燃料)

経済効果(菜の花畑観光、様々な雇用機会創出)

卒業論文では、秋田県小坂町を事例に菜の花の多段階活用の経済性を評価し、単位面積あたりの水田から生まれる付加価値は、米生産時におけるそれを大きく上回ることを明らかにしました(米生産:31,416 円/10a、菜の花多段階活用:84,871 円/10a)。それとともに、菜の花の多段階活用を地域に広めるための課題を提示し、様々な角度から提言を行いました。

2007 年度、町では提言に即した改革を実施しています。



